

ふるさと「阿南市」のすばらしい魅力を再発見!



地域で受け継がれる
赤いちゃんちゃんこ
(新野町)



④中学校の卒業アルバムから顔写真を取り込んだ名札。⑤次の代へ引き継ぐようす。

賀寿で最初に迎えるのが還暦祝い。「赤いずきん」に「赤いちゃんちゃんこ」を着せ、子や孫が集まって宴を催す、日本特有の風習である。還暦祝いは親族で行うのが一般的だが、新野町では代々、2月に中学校の還暦同窓会を行い、赤いちゃんちゃんこを着て、互いの「再出奔」を祝い合うのが慣例化している。全国的にも珍しい、この取組を訪ねてみた。

昨年2月11日、轟神社で昭和29年、30年生まれの同窓生51人が参加して還暦奉告祭が行われた。名札に記された「あれから44年」の文字に、万感の思いを巡らす。もう60歳か、まだ60歳か。普段は意識しない年齢も、久しぶりに会う旧友たちに自分の年齢を重ねてみる。

お目当ての赤いちゃんちゃんこは、祝賀会の席で披露された。フェルト生地で単衣の清楚な作り。白布を敷いた机の上に座布団と一緒に置かれていた。宴もたけなわ、幹事の一声で記念撮影が始まる。「これがうわさのちゃんちゃんこけえ。どうぞ、似合うか」

「よう、似合うわ」(笑)



赤ら顔で照れくさそうにポーズをとる旧友たち。「老いを意識するのはまだ早い」と、とびきりの笑顔を振りまく。

ところで、この取組はいつから始まったのか。人伝いに調べると、1人の幹事に行き着く。昭和18年、19年生まれの同窓生である藤本芳徳さん(71歳)だ。

「人生80年の時代ですが、60歳で元氣ならひとまずお祝いしようと思いついたのがきっかけです。知人に仕立ててもらったのですが、一度きりではもったいないので後輩に引き継いでもらうことに。あれから13年、今も大切に使っていたでいることをうれしく思います。2対の赤い羽織が、地域の絆を縦へとつむいでくれています」と、感慨深げに話す。

7月15日、役目を終えたちゃんちゃんこは、また次の代へと引き継がれた。この先、何人が袖を通すだろう。「赤」は力をくれる。人生の節目を祝う「ちゃんちゃんこリレー」で、もう一度赤ちゃんちゃんこのような力を得て、人生の後半戦を謳歌してほしい。